

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第40回 新しい年を迎えたいけれど…

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

明けましておめでとうございます。

令和6(2024)年が始まりましたが、皆様どんなお正月を過ごされたでしょうか。

筆者は元日の朝、自宅ベランダから初日の出を拝み、昇る太陽の写真を撮りました。リビングルームに降りて、お屠蘇とお雑煮、お節料理などで新年を祝った後、家族や妹一家と一緒に両親の墓参りをしてから、再び自宅に戻り、年初めの宴会を催しました。毎年同じ1月1日の日課です。

日本では1月1日が元日で祝日ですが、2日、3日を含め、「正月3が日」として、仕事を休み、ゆっくりと新年を祝う習慣が定着しています。その昔はその間、海産物や野菜などの卸売市場が休みで、商店や飲食店も閉店していることから、お節料理はその間の保存食としての意味も込められていました。しかし、最近は各家庭に冷凍冷蔵庫が普及したうえ、コンビニエンスストアが年中無休で営業しているほか、2日頃から初売りをしているデパートやショッピングセンターが多く、レストランの中にも開いている店があります。それだけに、お節料理のありがたみはなかなか伝わらなくなってきました。

とはいえ、元日の朝食前に三段重ねの<sup>さかづき</sup>盃に<sup>かちよう</sup>家長がお屠蘇を<sup>そそ</sup>注いで1人1人に振る舞い、「おめでとうございます」と挨拶することで、新しい年を迎え、気が引き締まります。かつては日本酒に<sup>みりん</sup>味醂と<sup>とそきん</sup>屠蘇散を入れてお屠蘇を作りましたが、後で車の運転などもするし、未成年の子供もいるので、我が家のお屠蘇は日本酒を入れず味醂ベースです。そのあとに頂くお節料理は、カズノコ、伊達巻、紅白のかまぼこ、昆布巻き、黒豆、<sup>なます</sup>膾などを重箱にきれいに詰めてあり、目と舌で味わう正月の楽しみです。

今年はちょっと手を抜いて、お節料理の多くを市販のもので済ませましたが、栗きんとんなど一部は例年通り、自宅で用意しました。

我が家のお雑煮は<sup>す</sup>澄まし汁に<sup>かくもち</sup>角餅です。これは地方によっていろいろで、味噌仕立てのものや丸餅、焼餅など、家庭ごとに違います。実家で食べた幼いころの故郷の味を懐かしむ人も多いはずで

す。  
新型コロナウイルス感染対策の行動規制が4年ぶりに完全解除されて初めての正月です。両親が眠る墓地に続く道は、久しぶりに自動車が渋滞していました。この日、関東地方は好天に恵まれましたが、ちょっと強い風が吹く中で墓参りを済ませました。境内の駐車場に行くと、餅撒きが行われ

ていました。寺の庫裏のベランダから僧侶たちが参拝客に向かって小さく切ってラップで包んだ紅白の餅を撒いています。その後は子供たちによる餅つきや、つき上がった餅や甘酒の振る舞い、福引抽選会などが行われ、多数の善男善女が押し合いへし合いして新年を祝っていました。

コロナ禍を潜り抜け、久しぶりに本当の日本の正月が戻ってきたように思いました。

しかし、自宅に戻って乾杯し、家族で寿司やお節料理をつつき始めたころ、スマートフォンを見ていた長男が「大きな地震があったらしい！」と奇声を発しました。「そういえばここも揺れたような気がする」という者もありました。慌ててテレビをつけると、アナウンサーが「大きな津波が来ます。テレビを消さなくていいので、すぐ高台に逃げてください」と絶叫しています。「平成6年能登半島地震」の発災でした。地震の被害については、みなさんご存じでしょうし、日を追うごとに規模が大きくなっているのです、割愛します。

そして、翌日は羽田空港で起きた日本航空機と海上保安庁機の衝突炎上事故。マスコミ界では「大きな事件事故は2日続けて起きない」という言い伝えがありますが、筆者が事件記者になった直後の昭和57(1982)年2月に起きたホテルニュージャパン火災と翌日の羽田沖日本航空機墜落事故を思い出しました。

能登半島地震では、被災地の多くが狭い半島の奥の方であり、おそらく多くの家で正月の祝宴が始まっていたことでしょう。日本海側はお酒や魚がおいしい地域であり、楽しい会話が弾んでいた最中の大きな揺れであったであろうことは想像に難くありません。そうした人たちに津波からの避難を呼びかけるのは大変だったと思いますが、テレビのアナウンサーの緊迫した大きな声は、平成23(2011)年3月の東日本大震災の経験とその後の訓練のたまものだったでしょう。そして、海岸近くにいた人たちの多くは津波が到達する前に避難することができました。実際の津波は13年前ほどの規模にはなりませんでした。あの時の経験が大きく役に立ちました。

被災地は山が海まで迫るところが多く、ほとんどが細い道路ばかりです。地震による土砂崩れや地盤の隆起・沈下などでこれらの道は寸断され、能登空港は滑走路が破壊されて航空機の離発着ができなくなりました。特殊な地形のためにもともと港が少ない地域であり、その港も地殻の変動や津波のため、使用不能になったところが多かったようです。1週間後にはさらにその上に雪が積もり、凹凸になった路面が見えなくなり、傾いた建物はさらに壊れる危機にさらされ、冷え込みも厳しくなりました。

野党各党は「救援が遅い」「自衛隊は逐次投入ではなく、一気に大部隊を入れるべきだ」などと政府を批判しましたが、この地域の特殊性から、今回の対応はかなり難しかったものと思います。しかも、元日の出来事であり、ほとんどの役所や会社が休日体制であり、悪い条件が重なったとい

えるでしょう。その中で、ヘリコプターや上陸用舟艇<sup>じょうりくようしゅうてい</sup>を利用したり、徒歩で現場に入ったりした救助隊は、必死の活動でした。

時間がたってもなかなか被害規模がわかりませんでした。現場は日本有数の観光地であり、地元住民の他、帰省客や国内外からの観光客など、その現場にいることをもともと行政が把握できない人たちも災害に直面しました。果たして犠牲者、行方不明者の正確な数がわかるのでしょうか。コロナ禍が終わり、外国からのインバウンドも全国的に広がっている中での正月休み中であり、これまでになかった新しい問題ではないかと思えます。

翌日起きた航空機事故では、海上保安庁機の6人の乗員のうち5人が亡くなりましたが、日本航空機の乗員乗客379人は事故発生後18分で全員が機外に脱出し、命を取り留めました。欧米のメディアはその避難劇を「奇跡だ」としてトップニュースで報じて称えましたが、日本のメディアは外電を転用するだけで、全員の命を守った航空会社の対応を報じるのが遅れました。事故はあってはいけませんが、起きてしまった以上、関係者の命を守ることは最優先です。日本航空の乗務員はその訓練をしっかりと積み、緊迫の現場でその実力を冷静に発揮できたのでしょうか。

現場のC滑走路は日本航空ではなく、全日空の駐機場の近くでした。それだけに、日本航空機が止まった場所の近くには、多くの全日空機が停まり、同社の職員もいました。彼らはすぐに事故機近くに駆け付け、避難した乗客を誘導、近くの全日空機の電源を入れ、機内のトイレなどを乗客たちに提供したそうです。他社の事故でもすぐにこういう対応ができるのは、航空各社が同じように社員訓練し、共通の事故対応技術と意識を持っていたからこそでしょう。

事故原因については、事故調査委員会や警視庁が調査、捜査中であり、結論が出るのは時間がかかるでしょう。専門家と言われる学者たちは、「複合的にミスが重ならないと事故にはならない」と言います。海上保安庁機にミスはなかったのか、日本航空機から滑走路上の機体が見えなかったのか、管制塔は的確な指示を出していたのかなど、様々な事故要因が検討されるでしょうが、事実のすべてを明らかにして、次の事故が起きないように対策を立てなければいけないでしょう。

3日以降も各地で火事などが相次ぎ、正月の松飾りも取れない7日、自民党派閥のパーティー収入不記載問題で、国会議員が逮捕されました。年明けの1週間で大きな事件が続発しました。地震は天災とはいえ、これらの事件事故には、何か国民の気のゆるみがあるのではないかと気がかかります。

今年の干支は辰。「辰年は波乱が多い」といいますが、それを象徴するような年明けでした。ウクライナやイスラエルだけでなく、世界各地で戦火が続いています。北朝鮮は黄海<sup>こうかい</sup>にミサイルを大量に撃ち込み、中国は尖閣諸島<sup>せんかくしよとう</sup>（沖縄県石垣市）の日本領海外側の接続水域に年末年始を挟んで連日海警局の船を航行させています。日本の国の守りが弱かったり、綻び<sup>ほころ</sup>が見えたりすれば、侵攻し

ようとする勢力が虎視眈々<sup>こしたんたん</sup>と狙っていることでしょう。2024年は台湾をはじめ、ロシア、米国、欧州諸国など、多くの国で選挙が行われます。日本でも岸田内閣の支持率が下がっている中で、事実上首相を決める自民党総裁選が近づいています。災害や選挙で体制が弱体化したとき、何が起きるかわかりません。災害事故ですっかり気分をそがれた正月でしたが、今年は危機意識をもって様々なことに対処しなければなりません。